

## 3E07 古代からの日本の二通りの歴史的な緋染め、

### 世界の緋染めとそれらの Ca による後媒染の違い

(東工大名誉) 小見山二郎

奈良時代からの伝世品が残っている日本の茜染(緋色)には、植物種の日本茜とともに、異なる二つの媒染法が、共存して明治時代に至ったという特徴がある。毎年、正倉院展では1200年間色が褪せない緋色を見ることができる。これは、小見山らが指摘し、2年後に虎尾俊哉編「延喜式 中」で歴史家が認めた大蔵寮、東宮呉服料項に書かれた方法で、白礬[明礬]で先媒染する染色法である(1)。但し、それだけでは、染色物の黄色みが勝ち、正倉院の緋は再現されない。小見山らが「重ね媒染」と呼ぶCa塩での後媒染で、色相が赤に近づき特に日光堅牢度が、7-8級と異常に高くなった。明治期以来、すべての工芸染色家は椿灰による先媒染で正倉院の緋色の再現を試みているが、染色物から色素が昇華したり、光堅牢度が4級であることなど、再現は出来なかった(2)。正倉院事務所の研究者も、やはり椿灰法を用いたが、自ら認めるように、吸収スペクトルのピークが伝世品と違っていた(3)。このように、椿灰と重ね媒染の異なる二つの系統の染め方が、日本の歴史にはあって、今に至っている。これらの2通りの染色法が日本の歴史を貫いていることを経糸に、世界的に用いられた麩を使う技術を横糸として緋染めを議論する。

2. 各時代の遺品の色をみる。正倉院の緋、春日神社大鎧二両の二つの異なる緋、京都国立博物館編「日本の甲冑」中の赤糸威しの鎧の数々、武蔵御岳神社の修理された鎧、明治天皇の緋色の幼児服(1968年、明治天皇紀)。なお、ルンゲの1835年の茜染の標準品(4)と2015年のGundersen(Caid)の染色品を参照する。

3. 日本の歴史において、二つの染色法は奇妙に交代して現れた後、途絶える。南北朝の後、室町、江戸、明治まで、天皇系、縫殿寮系の緋染めの品で確認されたものはない。一方、時代はまちまちだが、ドイツや、米国、中国における緋染めは、やはり明礬を用いている。いずれも明礬による先媒染だけで、後は水洗する。あるいは、トルコ赤染めに残るように、腐ったヤギの乳に浸すという。この理由もわかっていなかった。すべての歴史的染色法を合理的に説明することができるだろうか。時代と地域は異なるが、麩を用いる共通の技術の根拠は何か？

1. J. Komiyama, M. Suematsu, and S. Ogawa, *Dyes in History and Archaeology*, 20, 102 (2005)

2. 柏木罕介、近藤直子、*日本家政学会誌*、22、258(1971) 3. R. Nakamura et al., *Anal. Chem.*, 81, 569 (2009) 4. 小見山二郎、*家政学事典*、朝倉書店(2015)を参照せよ。

---

Duplicate Mordant Dyeing of Madder with alum and Calcium salts in the Histories of Japan and the world, Jiro Komiyama, Prof. emeritus, Tokyo Institute of Technology, 7-3-21, Miyagaya, Nishiku, Yokohama City, Tel:090-1668-0324, e-Mail: j\_komy\_1206@softbank.ne.jp